

緑のまちあれこれ

○ つい一年前まで北国分2丁目の外れの小さなコンビニ岩井商店の店脇にあったポストが店の移転と共になくなってしまった。

この近辺に住む私たちはまったく不便をかこっている。市議に相談したところ、目下検討中らしいが、一日も早く赤いポストが戻ってくることを願っています。

○ 朝晩すっかり冷え込むようになってきた。陽射しがあるのとならないでは、気温差がぐっと異なる。政治の雲行きも怪しくなってきた。一年足らずのうちにふたりも投げ出した総理とその与党の自民党。当てがあるのかなのか、ともかく解散を唱える民主党。アメリカの経済不況で株は大きく揺さぶられ、衆院選はしばらく先延ばしになるだろう。

探鳥会日程

〈北国分地区〉

平成20年12月7日(日) 小塚山あずまや10時集合

平成21年2月15日(日)

平成21年4月29日(祝)

〈矢切地区〉

平成20年11月22日(土) 野菊の墓碑10時集合

平成21年1月17日(土)

平成21年3月7日(土)

案内人 村岡幸生さん(日本野鳥の会会員)

○ ガソリンは原油が多少下がったとかで値上がりは止まったようだが、10月に入って食料品など物価がまたぞろ上がるという。誰だって物価は低いほうがいいし、暮らしは安らかなほうがいい。年金から天引きさせる後期高齢者医療制度がどのようにして考え出されたのか。もう随分前の内閣で閣議決定されていたのだそうだけれど。

○ 散歩の途中でいつも通る空地に何本かの若木が植えられていた。それが栗の木だったと気がついたのは、いつか“いが”が三つほどついていたからだった。桃栗三年 柿八年 たしかに栗は三年で実がなるのか。そう思っているうちに栗の“いが”は、落ちたのか、とられたのか無くなってしまっていた。

■編集後記■ 今号は、文字の多い文章が多くなりましたが、大切なことなので多少長くてもそのまま載せました。食欲の秋、そして芸術の秋です。生活にうるおいを。

緑のまち

—北国分だより—



第87号 2008.10.15 発行

編集 北国分外環対策協議会
市川市北国分 2-29-12 越田方
Tel 047-372-8936



北国分外環対策協議会総会 (報告)

8月2日(土)、午前10時～午後0時半、
小塚山研修所で開催。19名が参加。

- 事務局からの活動報告、会計報告、会計監査報告について活発な意見交換があり、議事は承認されました。
- 20年度のおもな活動計画
 - ・「緑のまち」発行 10月 1月 4月 7月
 - ・バードウォッチング 12月 2月 4月
 - ・森の音楽会 5月(予定)
 - ・公害調停 10月9日(木)以降未定
- フリートーキング
小塚山トンネル工事による被害について、近隣住民の方からの発言は以下の通りです。
 - ・寝ていると工事の震動でいつも船に乗っているような状態。
 - ・震動で洗面所の配管がずれ、床下に水が染み出した。
 - ・震動により、外壁に亀裂ができた。

(以上、概要を記す)

〈第6回 公害調停〉

去る8月28日、千葉市で開催。住民20人参加。7月4日に行われた外環路線(矢切から高谷まで)の現地視察について調停委員長から報告があった。

次回第7回調停は、10月9日、工事による被害と供用後発生する被害について。

石油価格と地球環境

野村 道人

石油（原油）価格は7月11日に147.27ドル/バレルをつけた後、世界の景気減速懸念→石油の需要減予測や、ファンドなど投機筋が金融バブルで損失資金を引き上げていること等により下降しつづけ、現在100ドル/バレル付近で上下しています。でも残念ながらこれは一時的な現象で、いずれ価格は天井知らずの上昇をつづけ、石油製品を燃料にするのは、特殊な交通機関（航空機、船舶等）に限られ、ビニールなどの石油化学製品もごく限られた用途に絞られてくるでしょう。

世界の自動車業界で断トツだったGMが、創立100周年の節目の年に倒産の危機に面しているのは、なるべくしてなったといえます。20世紀は石油製品を燃料とした内燃機関の時代で、その代表が自動車でした。しかしその石油も高いだけでなく、枯渇間近かです。オイル・ショック以前の石油は可採年数90年余、ほとんどがアラビア半島の周辺に集中していました。今日では採鉱技術の発達で中近東以外の産地もそこそこ増える一方、石油価格の上昇で採掘方法が多様化（自噴以外に加圧、オイル・サンド、シェール等）したため、可採年数はあまり短縮されず、40～50年ぐらいというのが大方の見かたです。

現在需要量は8,600万バレル/日ですが、10年後には1億バレル/日を超える見通しです。このまま増え続けてゆけば、遠くない将来、石油はレア・メタル並みの希少品になるでしょう。

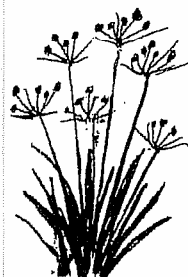
40年ほど前から、小生は「エネルギー危機と食糧危機がほぼ並行して2030年ごろ来るのではないか」と言ってきましたが、不幸にしてもっと早く、しかも強烈な環境破壊と気候異常を伴って襲来しつつあります。40年前ローマ・クラブが警告した「地球は有限な宇宙船である」が思い起こされます。

21世紀は少なくとも前半は電気の世紀でしょう。エネルギー源として、また機能の多様性からして主役の資格は十分です。ただいかにして効率よく、しかも公害を少なくして発電するかが問題です。今のところ主役不在というところ。半世紀前に核融合の実用化が研究され始めたころ、2030年ごろがその目途でしたが、難しいと思います。核融合発電と常温超伝導が実用化されると、エネルギー危機はほぼ解消しますが、あまり期待できません。エース不在なら、いろいろ繋ぎ合わせてしのいでゆくしかありません。そこで大事になってくるのが省エネです。

人口減が進み、このままでゆくと日本の人口は8000万人台になると大騒ぎをしていますが、篤姫の時代に戻るだけのことです。江戸時代は鎖国の中で自給自足を続けました。その中から“物を大切に” “自然との調和” “譲り合い、助け合い”などの習慣が根付

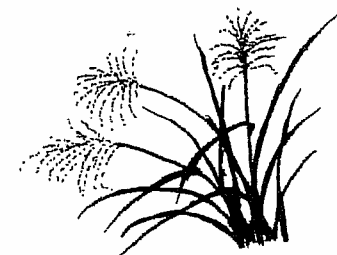
きました。さらに諸藩による地方分権が、独自の文化と自然、産業・経済を育てまもりました。その結果“地産地消”が当然のこととして行われました。首都圏4県に総人口の3分の1が集中しているひずみを是正し、地方に人口が分布してゆくことにより地域コミュニティの復活、自然の再生、そしてなによりも“地産地消”がすすみ、東京を軸とする無駄な人&物の移動がセーブされるでしょう。これは省エネに大いに寄与します。

一方グローバル化は急速に進むでしょう。ここが篤姫時代とは違うところです。地域への人口分布とグローバル化に対応するための施策、中央集権→地方分権、地方産業の振興、教育、医療の充実等、が求められます。そして道路建設もこの視点から進められるべきです。外環は政治家に将来を見据えた国家ビジョンが欠落し、役人は使命感乏しく、ただ面子と保身のみに汲々としていることの具現、象徴です。地元住民の生活を侵し、歴史と自然を破壊し、その結果として首都圏集中を助長し、自動車にいつまでも頼ることにより、輸送手段の効率化（＝省エネ）を遅らせることになるという、施策者の問題点の不勉強さ、鈍感化さには言葉ありません。お上を信用した結果が外環です。今更悔やんでも仕方ないので、今後は決して鵜呑みに信用せず、自分たちの町は、まず自分たちの手で守ってゆくことが、本当に大事なことだと思います。



歌の玉手箱

稲見 由美



ランドセルを開けたり閉めたり、賑やかな帰り支度の始まった教室へ駆け込むや先生は大急ぎで黒板にその歌詞をお書きになりました。急に転校することになった級友を歌で送るために。別れの寂しさよりも、再会を期する温かさが、シンプルな言葉と旋律から、ふわりと香り、時を隔てた今、口ずさむと少し埃っぽい教室が懐かしく浮かんできます。

一人ひとりがかけがえのない存在であるという実感が薄れゆく社会を残念に感じます。若い日にまっすぐな心で‘出会う’ことができたなら何かが違ってくるかもしれません。本と、絵と、そして何よりも人と。心をつなぐ出会いがありますように。大切なあなたに。大切な自分に。

♪いつまでも絶えることなく 友達でいよう

明日の日を夢見て 希望の道を♪

「今日の日はさようなら」詞/金子詔一

土地収用法について

外環反対連絡会の公式見解

国は既に今年の1月に外環事業に土地収用法を適用する準備に着手することを表明していましたが、9月25日午後6時半から市川文化会館で事業認定申請の事前説明会を行いました。一般への周知は新聞紙面などの公告によるはずですが、そうした措置はとられず、国は公告期日ぎりぎりまで一般には知らせないという姑息な措置をとっているようです。

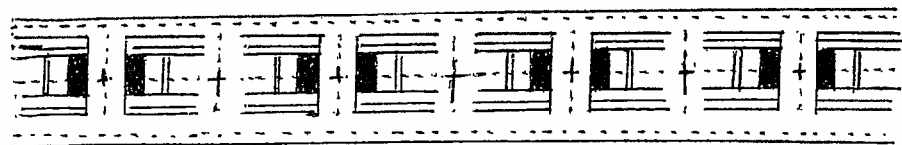
外環に土地収用法を適用しようというのは道路の用地取得が行き詰まっているからで、その大きな原因の一つに環境問題が未解決のまま外環事業を推し進めようとしていることです。千葉県環境影響評価委員会から多くの問題点を指摘され、事業実施以前に、ジャンクションやインターチェンジなどの影響が大きい特殊部周辺の予測の検証、長期に安定的に環境保全目標が達成できるような対策の検討などの実施が求められていますが、それに対し国はいまだにこれを実施していません。このことについては6月の千葉県議会でも知事に質疑が行われ、知事は環境影響評価で指摘されたことについて国に確実に対応を求めていかなくてはならない旨の答弁をされました。

土地収用法は国道や高速道路が土地収用適確事業に含まれると規定していますが、これは国道や高速道路であれば国がいつでも収用法を適用できるとしているわけではありません。環境影響評価は国が行おうとしている事業が環境に重大な影響を発生させるおそれがあるかどうかを判断するものですから、その中で問題点が指摘され、それがクリアーするための対策がなされていなければ国が主張する事業の公共性は根拠を失うことになります。

国は「外環を平成27年度中に完成させるためには用地取得を今後2年程度で終了させる必要があり、土地収用法の適用はやむをえない措置」としていますが、そもそも外環を平成27年度までに完成させることは客観的に無理な状況にあります。7月に開催された市川市議会外環特別委員会に提出された資料では、松戸～市川区間（高谷JCTから松戸市川境の松戸IC区間で、矢切地区や江戸川架橋部分の事業費は含まれていない）高速専用部の事業費を7,600億円とし、これまで執行した事業費を1,400億円と報告しています。平成27年度までに高速専用部を完成させるためには年間1,000億円規模の事業費を投入しなければなりません。しかも7,600億円とされている事業費は平成17年の道路公団民営化に際し暫定的に設定した事業費で、今年中に再検討されます。鉄鋼など建設資材の高騰や地下水対策など技術的な困難を考えると事業費が膨らむ可能性もあります。高速専用部の今年度事業予算は約180億円です。「事業予算は必要な時期が来れば必要なだけ確保できる」と説明していますが、10kmに9,000億円規模の予算を民営化会社がつけられるとは到底思えません。

参考までに、東日本高速道路株式会社は平成32年までに420km余りの高速道路を建設することになっており、その総予算は約1兆4000億円です。市川外環10kmの道路に全体の事業費の半分以上を投入することになるのです。道路事業を「国民に負担させることなく民間会社に担当させる」という説明は国民を誤魔化すまやかしであり、まともな事業計画ではありません。

国と東日本高速道路株式会社が、事業説明会開催を決めたことで、今年中に事業認定申請を国土交通大臣（審査部門は本省土地収用管理室）に対して行うものと思われます。これまでの他の収容事業の例が示すように起業者と認定審査部局の間での事前了解は既にできているわけですが、私たちは公聴会開催請求を行い事業認定手続きの中での申請内容の不当性を主張することになります。2000戸を超える住民の住まいを奪い、環境破壊の道路を建設することが“公共性”に値するのでしょうか。私たちはこのことに対する事業者側の見解を厳しく追求するとともに、広く世論に訴えてゆく決意です。



月見草

岡田 優子

ドミノ倒しのように
家が壊される
軒下の風鈴
夕涼みの縁台
昨日まで路上に流れていた笑い声
みんな何処へ行ってしまったのだろう
素早く
立入禁止の札が立てられる
張り巡らされた金網の内側
押し潰されたはずの月見草が
立ち上がる
ひとつ またひとつ
西陽を受け 燃え盛る火花のように
石塊だらけの地面を
埋め尽くした

北国分の道 市川の道 (3)

西畑 健一

家が建ち人が住むようになると道ができる。山の中にも‘けものみち’ができるが、家と家との往来がものを運び、人と人とが行き来して定まった道が固定する。分かれ道ができ、交差路ができ、大きな道には排水溝がつくられたりもする。往来の多い道には庚申塚や馬頭観音が道標の役割を果たし、そのことから当時の交通路が確認されることにもなる。

北国分には、大池の三叉路(3丁目と4丁目の境界)に、青面金剛の文字を刻んだ庚申塔があり、文化4年の銘がある。「是より西 江戸 北大はし 道」の文字が読める。4丁目側の祠には馬頭観音6基がある。このうち2基はもともとは見晴台下の庚申塔の位置にあったものだという。文政4年、弘化3年、弘化4年、明治4年、大正9年、大正13年に建立された。倒れた馬の供養のためのもの。往来の車や馬が多かったことを物語っている。

松戸市境の、前回にも触れた律令時代の官道が、江戸時代にも利用されていた道の名残として、国府台6丁目化研病院手前に青面金剛(像)と、北国分4丁目外れ二十世紀が丘境の青面金剛(文字)が残されている。化研のほうは、元文3年というから文化4年より70年も前、今から270年前になる。(4丁目のほうは天保12年だから160年ほど前)。「右市川道 左国分寺道」とあり、高橋三左衛門・高石清兵衛と寄進者の名が彫られている。立派な彫像の青面金剛で、いまだに手向けられた花が絶えない。4丁目のほうは石柱に文字を刻んだだけの青面金剛で、「南 いち川 西 まつど 北 金ヶさく 道」と道標にもなっている。

北国分にはこのほか、いざなぎ神社入口に青面金剛(文字)の文化6年の道標があり、「西 松戸 東 堀之内 南 国分寺 北大はし 道」と刻まれている。

市川には、千葉街道(国道14号)沿いの消防署の先に、かつての成田参詣道として賑わった跡を示す立派な道標が残り、八幡から行徳に通じる行徳街道には多くの庚申塔が残されている。ただ道路改正で、もとの位置から移動しているものが多いのが残念だ。



初秋の花 葛(クズ)

谷口 浩之

今年も立秋を過ぎても暑かったが、道免き谷津を歩いていると、いい香りが漂ってくる。紅紫色をした葛の花の甘い香りだ。フジと同じ、マメ科で、日当たりのよい場所に生育する半低木性のつる性植物である。

大きな葉を茂らせ、外環道のフェンスを覆いつくすほどからみついている。堀之内、国分や稲越の方まで空き地があればどんどん繁殖している。時には交通標識をも隠してしまうほどのたくましさに驚かされる。しかし緑の少なくなった市川で、それもよしとしたいが、あまりの傍若無人さに眉をひそめる。さすがに真夏の太陽には閉口すると見えて、葉をたたみこみ、直射日光を防いでいる。房状の、下から順に咲く花は、葉の裏側に見え隠れしていて写真には撮りにくい。

葛の語源は、奈良県吉野郡の国栖(くず)地方で古くから食用にしたり繊維を使い織物に使われていたことから“くず”と呼ばれたとか。吉野葛は今でも有名である。

根から生薬の葛根(カッコン)や葛粉(くずこ)と呼ばれる澱粉をつくり、葛餅や葛切りにも使われるのは、ご存知のとおりである。

萩 尾花 葛 なでしこ おみなえし 藤袴 桔梗(秋の七草)

*

旧三浦医院前の坂道を南に下って行くと、甘い香りを放ち、黒アゲハを呼んでいたクサギの木が外環道工事のために姿を消してしまった。隣に墓地があったが壊され、氏名不明の遺骨が発見されると告知板が張ってある。時あたかもお彼岸。帰る所が無くなってしまったご先祖様もお気の毒である。罰当たりなことだと思った。

